京都・平安京跡・旧二条城跡

1　所在地　京都市上京区両御霊町ほか

2　調査期間　一九九二年（平4）六月～一九九三年六月

3　発掘機関　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

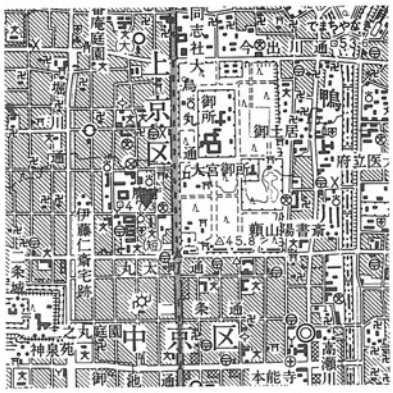
4　調査担当者　森島康雄

5　遺跡の種類　城跡・町屋跡

6　遺跡の年代　一六世紀～一七世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

京都府警察一一〇番指令センター（仮称）新築工事に伴う発掘調査を、九二年度から九三年度にかけて実施した。調査地は、平安京左京一条三坊六町の南西約六分の一にあたり、織田信長の旧二条城の北西部分に位置する。調査は、大きく北地区と南地区に分けて実施し、遺構の時期としては第一面（江戸時代初頭）と、第二面（桃山時代）に分けられる。第一面では江戸時代初期の町屋に関する遺構が、第二面では豊臣秀吉による天正地割り施工に伴って埋められた堀などが検出された。また、南地区で「違い鷹羽」の飾り瓦が出土したことから、この近辺に浅野長政の屋敷があったと推定される。



（京都東北部）

木簡の出土した場所は、両地区に及んでおり、時期も第一面と第二面に相当する桃山時代から江戸時代初頭の土坑、溝などである。共伴した遺物から、木簡の時期もそのころと推定される。

8　木簡の釈文・内容

木簡は、全部で一八点あったが、確実に判読できるのは、次の六点である。

(1)　「（梵字）　奉転読大般若経富貴　(370)×50×3　059

(2)　・「〈いぬ　半右衛門尉米」
　　・「〈〇（記号）　半右衛門尉　」　125×15×3　032

(3)　・「〇（穿孔）勝左衛門尉」
　　・「〇（穿孔）□左衛門尉」　56×15×5　011

(4)　〔角行カ〕□衍　(110)×(56)×(7)　065

(5)　〔於ゆカ〕「□□のミ」　101×31×8　011

(6)　「〈四郎衛門」　181×25×4　032

(1)は、いわゆる転読札で、富貴を祈願している。(2)は、戊の年に貢納した米を記述している。(3)の上部には、穴が穿たれており、何かを綴じたものとも思われる。(4)は、詳しくは不明であるが、あるいは将棋の「角行」と関係のあるものかもしれない。(5)は、上の二文字がはっきりしないが、「於」「ゆ」の可能性が高い。そうすれば、「お湯呑み」となり、茶碗を示した付札のようなものと推定できる。(6)は、人形状の木札に「四郎衛門」という名前が書かれている。

これ以外にも、墨痕のある木片が多数出土しているが、判読はできなかった。時期は、同じく桃山時代から江戸時代のものである。

なお、釈読に当たっては、奈良国立文化財研究所の綾村宏氏、館野和己氏、森公章氏、渡辺晃宏氏のご教示を受けた。また、現地の発掘調査成果や出土状況などについては、京都府埋蔵文化財調査研究センターの森島康雄氏より教示を得た。

（土橋　誠）

京都・遠所遺跡出土木簡（補遺）

本誌一四号で報告した同遺跡の出土遺物について、整理をすすめたところ、新たに木簡が確認されたので、紹介する。

「〈余戸郷□□（物部カ）真成田租籾五斗〈」　297×20×6　031

この木簡は、製鉄遺跡とされる遠所遺跡の砂鉄埋納土坑から出土した。この木簡に書かれた余戸郷は『倭名抄』では、調査地の所在する郡には存在しないこと、類例の少ない田租の荷札木簡であること、また、製鉄関係の遺跡と見られる発掘地で、この木簡が出土したことの意味など、今後検討を要する問題を含んだ木簡である。

（土橋　誠）